

第3回 批判的言語教育国際シンポジウム 2025年8月8日（金）15：00～17：00 関西大学千里キャンパス C204

【ポスター発表&ディスカッション】『インクルージョンを推し進めると言語教育の本質が見える！』

植村麻紀子・池谷尚美・中川正臣・古屋憲章・山崎直樹

<ケース1>漢字は手で書かなければならない？

手で字を書くことに困難を抱えるディスグラフィアという障害があります。学習においては、これまで伝統的に手で書くことが重視されてきました。特に漢字を学習する場合、手で書くことが必須であると考え教師も多いようです。本ケースでは、手で文字を書くことに困難を抱えた学習者に関するケースをとおして、自身の教室に多様な学習者を包摂することの意味や手で文字を書くことと言語教師の言語能力観の関係等について考えます。



言語教育における
インクルージョン
を考える

<ケース2>スケジュール管理が苦手で、忘れ物ばかり

これは、京都の私立大学で中国語を教える佐藤先生が、ADHDと診断された1年生・鈴木さんの困難に向き合った事例です。鈴木さんは宿題や重要書類の提出を忘れることが多く、リマインダーアプリを導入することを佐藤先生に提案します。あなたならこの提案を受け入れますか？意見や立場の違う先生や事務職員の声も交えながら、鈴木さんへの支援、大学生としての自律や私達の社会における時間管理の価値についても考えます。

<ケース3>ゼロからイチにするのが苦手です

本ケースは、「見通しのない課題に対する不安」を抱えるあゆみさんを、どのように支援するかに悩む田中先生の事例です。あゆみさんは肢体不自由で、高校まで特別支援学校に通っていたために手厚い指導を受けてきました。障害の有無に関わらず、初めの一步を踏み出すのが困難な学習者に関するケースをとおして、言語教師がどのような足場かけ（Scaffolding）をすることができるか、またすべきかについて考えます。

<ケース4>みんなの前で発言や発表をしたくないのですが、、、

私たちは幼少期から大勢の人の前で、発言を求められたり、発表をするように言われてきました。そして言語教師になった私は、今、それを学生たちに求めています。このケースでは日本語教員養成にかかわる授業の中で、人の前で発言したり、発表したりすることに抵抗を持つ学生がいた場合、私たち教師はどのような対応をすべきか、その学生の心の中も含めて皆さんと考えたいと思います。

<ケース5>授業中にヘッドフォンをつけている！

授業の成果発表会にヘッドフォンのような器具をつけたまま現れたSさん。参加する意志はないのかと周囲は騒然となります。聴覚過敏の自衛措置のようですが、本人は周囲への説明を拒み、教師たちは対応に苦慮します。配慮と特別扱いの差は何か、配慮に個人情報の開示は必須なのか、誰もが参加しやすい学習環境の構築に際して教室における「当たり前」は何の意味をもつのか……そんな問題を提起し、みなさんの常識を揺さぶります。